



ゲスト◎ 株式会社高橋工業 代表取締役

高橋和志氏

工場は流されても、やる気は流されていない

プロはケンカしない

— 東日本大震災では本社社屋と工場が全壊し、大きな被害を受けました。

震災直後とはかく生きることで精一杯。道路は寸断され、水も食料も来ない。自宅も半壊して、1カ月半は屋外のかまどで料理をしてました。やっと5月ごろから工場の瓦礫の片付けに手をつけて、そこから少しずつ再建の足場を固めてきたところです。去年の12月には工場跡地に仮工場を建て、稼働を始めました。

確かに津波は不幸な出来事です。でも、こうして命はある。自然災害というのは一過性のものです。今になって振り返れば、「なんだ津波か」とも思える。もう前を向いてます。確かに工場も財産も全部流されたけど、やる気は流されてませんから。

— 被災後、弊社のコルテン鋼を使用した「IRON EOCOM」で、日本建築学会作品賞、大谷美術館賞、ものづくり日本大賞優秀賞をトリプルで受賞されました。

ありがたかったですね。コルテン鋼は10年以上前から使っていますが、これは今の時代にすごくマッチした素材だと思

プロフィール◎たかはし・かずし

1957年（昭和32年）宮城県気仙沼市生まれ。長崎造船大学大学院修了。気仙沼で江戸時代より続く船大工の七代目。85年、高橋工業を設立。造船技術を活かして陸上建築を手がけ、建築業界に新風を巻き起こす。代表作は日本建築学会賞を受賞した「リアス・アーク美術館」「せんだいメディアテーク」のほか、「LANVIN 銀座店」「IRONHOUSE」など。東日本大震災で被災し、工場・社屋が津波で流される被害を受けた。



IRONHOUSE

う。塗装でサビを抑えるのではなく、表面に保護性の高いサビを被覆させることでサビを抑える。つまり、コルテン鋼は有機溶剤や化学薬品を使わない「エコ」な商品なんです。公共の建築物などで支持される理由の一つでしょう。

また、意匠性も今の時代に合っている。サビというと、これまでは戦後のバラックのようなマイナスイメージだったけど、ヨーロッパを訪れて古い建物を見る日本人が増えて、サビに年代を経た美しさを感じるようになった。これ大きいですよ。

あと、コルテン鋼への注目は、鉄そのものが建築の表舞台に立ったという点でも意味があるんじゃないですか。建築における鉄は軸組みや鉄筋など、普通は裏方で目に触れることはない。けれど、「IRONHOUSE」などの建物は、その素材感、色彩、色調がデザインそのものですから。

——建築家や構造設計の専門家と一緒に、これまで数々の名建築を手がけられています。こだわりの建物が多いだけに、厳しい要求も多いと思いますが。

いや、それは厳しいという感覚とは違うな。自分はそもそも気に入らない人とは仕事をしないから(笑)。

建築というのは分業制で、建築デザイン、構造設計、素材、施工。関わる人間が多いから時間もかかるし、コミュニケーションも濃くしないとイケない。だからこそ、嫌いな人間と無理に仕事をしたってためなんです。イヤイヤやつても絶対にいい物なんかできない。

感性が合う人同士が組めば、お互いに難しい要求はしても、それは、どうやったらいい作品ができるかを思っていることだから、ちゃんと受け入れられる。同じ方向を向いていけば、嫌な気持ちになんかならないし、どうやったらできるかを必死になって考える。信頼してる上司から期待してるって言われたら、徹夜しても頑張るでしょ？ それと同じ。

気の合う人とやって、自分の持ち味を出し切れれば必ずいい物ができるはず。それがプロ。だからプロはケンカなんかしないんです。私にとっては何を作るかより、誰と作るかのほうが大事なな。

造船の技を建築に活かす

——もともとは江戸時代から続く船大工の7代目。時代の変化を、海から陸に上がることで乗り越えてこられました。

長崎の造船大学を出て、すぐに父が経営する造船所に入りました。でも、200海里規制による操業海域の縮小や、オイルショックによる燃料高騰が重なって漁業が不振となつて、家業であった造船所は廃業となりました。それが入社して3年目。

でも、「経済では負けたけど腕じゃ負けていない」と思つたし、代々受け継いできた船造りの技術を私の代で途絶えさせるわけにはいかない。そう思って弟と2人で溶接機をトラックに積んで、全国の港を回って漁船の修繕や艀装を

請け負って食いつないできました。

陸に上がるきっかけになったのは、94年に地元・気仙沼のリアス・アーク美術館の建設に関わったこと。この建物に造船技術の一つ、「ぎょう鉄」を使ったわけです。「ぎょう鉄」は船の曲面を仕上げるときに使う技術で、加熱・冷却による膨張・収縮を利用して、鋼板を熱したり、冷やしたりしながらたわめていくもの。この建物が日本建築学会賞を受賞したことで注目されて、その後、造船から建築へと活路を見出して今日に至っています。

——海の技術を陸に活かすという視点は非常に斬新でした。そもそも船大工は技術が高い。家大工は船を造れないけど、船大工は家を作れる。ただ、もっと重要なのはその技術を応用する力なんです。

例えば船の技を陸に使うのだからって応用でしょ。技術の一つ一つを見たってそうですよ。「ぎょう鉄」や、熱の膨張・収縮を利用した「はめ合い」といった造船技術はあくまで基本。全部教科書に載ってる。でも、それを実際に現場で使うには、それぞれの現場で求められる難しい条件に見合った応用力が必要なんです。

「はめ合い」は、別の素材同士を接着剤も使わずにぴったりとはめ込む技術ですが、より強力にはめ込もうとすれば、熱による膨張・収縮だけでなく、お互いの表面摩擦を利用する。すると素材表面の粗さをどうするか、最適な噛



船大工としての腕を磨いた青春時代



北九州市の公園に建設中の公衆トイレ

み合わせの表面粗さを見つけないならならぬ。だから応用力がなければ結局は使えない技術なんです。もちろん教科書になんか載ってません。

—— そうした技術向上のため、日々どんなことを意識されているのでしょうか。

そもそもモノを作るには、全体を把握することが大事。料理人は、下ごしらえも焼き場も全部知って一人前になれる。前後の仕事もきっちり理解して、その中で「ぎょう鉄」や「はめ合い」といった技術がどんな意味を持つのかを考える。大量生産の時代だと、ラインで同じ仕事をずっとやるでしょ？ そこではいちいちモノを考えて、余計な動きをするのは無駄なんです。でも、余計な動きをするってことが、実は学ぶことなんですよ。

いいモノを作るために何ができるか、それを常に考えること。昔は「習うより慣れろ」と言われました。でも、それだと親方以上にはなれないし、全体的な視点も持てない。「慣れ」は楽だから妥協もする。日々同じことの繰り返しじゃ工夫も生まれませんし、1000年やっても腕は上がらない。

現状に満足しないで、常に向学心を持つことが大切じゃないですか。

—— 工場を止めて技術研究に専念する時期があるとお聞きしました。

普通であれば工場を稼働させたいから、一つの仕事が終わると、すぐに次の仕事をとりまします。でもそれだと目先の仕事に追いかけて、それこそ「習うより慣れろ」に

なる。すると永久に同じ仕事しかできない。

そうではなく、やっぱり自分たちにしかできない仕事をしたいわけです。だから私の会社では、すぐに次の仕事に飛びつくのではなく、技術的な裏付けをとるための時間を設けます。

例えばコルテン鋼だつて奥が深いですよ。津波で流されましたけど、屋外に置いて、経年変化を見るための曝露試験もずっとやってきました。コルテン鋼は水に濡らし、乾燥を繰り返して保護膜を作るわけですが、凍ってしまうとうまくいかない。だから冬場なんか、やっぱり苦労するわけです。何時に水をかけて、何時までに乾燥させればいいのか。失敗を重ねながらノウハウをためていく。これが次の仕事に生きるわけです。だいたい1年のうち、3カ月近くはそういう実証研究にあてているのでしょうか。

いかに仕事の面白さを理解させるか

—— 若手への技能伝承についてはどうお考えですか。

例えばコルテン鋼と普通鋼でサビの発生がどう違うか。それをいきなり化学式で教えたつてダメなんです。まずは目で見て概念的に理解できるようにしてあげる。私たちでは社員用にテキストを作って教えていますが、数式は一切ないし、毎年手を入れて平易な言葉にしています。

あとは、仕事の面白さをいかに理解してもらうか。もちろん会社は寄席じゃないんだから、毎日仕事面白いなんて言ってる人間はおかしいんだけど(笑)、仕事って最後によかったと思えば嫌なことは全部忘れられるでしょ？ それを与えられるかどうかのポイントでしょうね。

—— 最後にこれからの抱負をお聞かせください。

今度、大学を卒業してほかで修行する予定だった長男が戻ってくるようになりました。「おい、オレのためだったら戻ってくるな」と言ったら「お袋のためだ」と言うので、ああそうかと(笑)。で、そうなったときに、ただ会社を復旧させて以前の状



津波で被害を受けた地域の人たちが、自由に集まってこれからのことを話せる場所にと、高橋氏が音頭を取って、竹を素材とした会所を建築した

態に戻せばいいのかと考えたら、それは違うと思った。息子もそうだし、ほかの社員も、みんな次の目標がないと前に進めない。だから今は3年後に被災前の売り上げを達成、5年後に海外支店を3つ、そして10年後には世界に名だたる高橋工業にする。そうビジョンを掲げました。

これは夢ですよ。でもホラじゃないんです。だって夢は必ず近づける。どうすれば近づくかと言えば、一歩一歩進めばいいわけです。何もしなければ近づくかない。

ただ、今までのやり方では実現できません。実は被災前は自分たちだけで仕事をしようと考えてました。でも、被災後はいろんな人ともつつながろうと考えるようになった。建築家やアーティリストなど、高橋工業のものづくりに共感してくれる人たちとコラボレーションして夢に向かいたい。

それと、やっぱり船もやりたい。環境に優しいエネルギーが主流になっていく中で、例えばバッテリーで駆動するクルーザーなど、有望な市場もあると思う。実は三男が大学で電子工学を専攻しているんですよ。だからこの間、「お前、卒業証書は持ってこなくていいから、今より10倍持つバッテリーを開発して持ってこい」と言っただけですよ(笑)。いつか実現させたいですね。